【教育実践報告】

高校３年生「現代社会論」での「書評ゼミ」の実践

―大学での「書評」と「ゼミ」の学びへの「架橋」としての試み―

新　嶋　　聡（地歴公民科）

要　旨

本稿は2018・2019年度に高校３年生の現代社会論で実施した「書評ゼミ」の実践報告である。大学の「ゼミ」で経験する「書評」の導入を目的とした「書評ゼミ」を通して、生徒たちは「１学期は本を要約し、フロアに分かりやすく伝えるという難しさを、２学期は本をしっかりと読み込んでいろいろな質問に答えることの難しさ」（生徒Ａの感想)、「「時間の使い方」を学べた」（生徒Ｂの感想）と考えられる。

はじめに
第１章　「書評ゼミ」とは
第２章　実践例
おわりに

はじめに

本稿は、筆者が高校３年生の現代社会論で実施した「書評ゼミ」の実践報告である。2018・2019年度の実践を振り返る作業を通して、自己研鑽の１つに代えたい。

現状での高校までの学びと大学での学びの違いに、ゼミナール形式の授業（以下、ゼミ）が挙げられよう。大学進学後、多くの新入生が主体的に発言す

ることが求められるゼミに戸惑うと予想される。その点、本校は中央大学の附属高校であるため、高校３年次に大学１年次の学びを「架橋」することにより、混乱を防げよう。また、ささやかだが本校が掲げる学びの特長の１つである「高大一貫教育」に貢献できると考えている。

なお、「書評ゼミ」は前任者の助言を踏まえつつ著者の経験を基に"手探り"で創り上げたものであるため、現段階では先行研究紹介や理論モデルを提示することはできない。文字通りの実践報告となる点を、あらかじめご容赦いただきたい。

第1章　「書評ゼミ」とは

「書評ゼミ」とは何か。本章では「書評ゼミ」の概要を明らかにすることを目的とする。第１節ではアウトラインを示し、第２節で配布物を基に詳細を述べ、第３節で小括を行う。本章を通して、筆者の考える「書評ゼミ」の全貌を示していきたい。

第1節　「書評ゼミ」の目的

本節では、「書評ゼミ」の概要を明示することを目的とする。本題に入る前に、現代社会論の授業概要と「書評ゼミ」の関係性、そして、目的や実施方法などを確認したい。

まず、現代社会論の概要である。現代社会論は高校３年生の文系全クラスで実施されている授業科目であり、週２日の授業である。筆者は2018年度より本校に赴任し現代社会論を担当することになり、基本的には前任者より伺った方針を継承して授業を実施している。さて、筆者の現代社会論では４クラスを対象に1989年の冷戦終焉以降の日本政治を中心に講義するが、必要に応じて環境問題・教育問題・経済学の基礎知識などのテーマ史も織り交ぜている。その講義時間の中から「書評ゼミ」の時間を割いている。そのため、後述のように授業内容を補完する本を選書している。なお、「書評ゼミ」は、１・２学期

に３回ずつ（合計６回）実施しており、３学期は実施していない。

次に、「書評ゼミ」の目的である。端的に述べるのであれば、「大学のゼミで求められる能力の取得」を目的としている。大学進学後は基礎演習などの少人数のゼミ形式の授業が増える。その際に求められる能力は、①レジュメの作成、②プレゼンテーション、③議論の能力であろう。いずれも場数を踏むことにって習得できるであろうが、③の議論する力を養うには時間がかかる。大人であっても議論が苦手という人は多いと考えられるからだ。そのため、議論あるいは議論の前提となる質疑応答の機会に多く触れることは、大学進学を控えた生徒たちにとって有益な機会を提供できると筆者は考えた。本校のような大学附属校では大学入試に時間を割くことは、少ない。それならば、受験勉強のために費やす時間の一部を③の議論の時間に充てることができるのではないか。そう考え、議論する時間を増やすことを目的として、「書評ゼミ」の実施に踏み切っている。

私事で恐縮だが、筆者は学部時代を文学部史学科で学び、大学院を法学研究科政治学専攻へと専攻を変えて学んだ。その際、方法論の違い、特に、ゼミでの議論の違いに驚いた。具体的には、端的に纏め議論することに上手く対応できなかった。このような大学院時代の手痛い経験は、筆者に聴衆の意見を踏まえて対話する経験を積むことの必要性を認識させてくれ、今に至っている。「議論する能力をどう育むか」という問題関心は、「筆者が痛感した戸惑いを経験してもらいたくない」という個人的な思いに起因している面も否めない。

続いて、実施方法である。基本方針として、各クラスで６～７人程度のグループを６グループ程度作り、１回の授業で２グループに報告および議論を行っている。本校は通常時は50分授業を実施しているため、１グループあたりに割く時間は最大25分程度（入れ替えなどもあるため実際には最大20分程度）である。報告は最大で15分とし、10分経過でベルを一回鳴らし、15分経過でベルを複数鳴らして強制終了とした。なお、報告を聞いている間、残りの生徒たちには「コメントペーパー」を記入し、各グループの発表内容をジャッジする

よう指導した（資料１）。実施時期は、一斉テスト後から学期末試験の２週間前までに設定している。なお、報告前に、１学期は２回、２学期は１回、筆者が原稿の内容チェック（原則、誤字・脱字までは確認しない）を行い、フォローしている。

資料１　コメントペーパー（2018年度1学期使用）

現代社会論　　月　　日　　コメントペーパー　3年　　組　　番　氏名:

そして、自分たちの報告が終わった生徒には、資料２に示した「現代社会論 書評ゼミ後の感想」（Ａ４片面１枚）を課し、当日に至るまで、および、当日の報告などについての振り返り作業をしてもらった（資料２）。自由記述としたこともあり、記述内容は多種多様であった。2018年度は初年度であったこ

とも関係し、特に１学期は実施時期などについての提案もあり、生徒の実情を知る上で大いに参考になった。なお、意図的に文字数規定を設けなかったため、記述量にも大いに差が生じた。裏面にまで記述をする熱心な生徒がいる反面、やっつけで数行程度書いて提出した生徒もいた。2019年度１学期も同様であったため、２学期以降は文字数規定を設定し、十分に振り返りをしてもらった。

資料２　2018年度１学期「現代社会論　　書評ゼミ後の感想」

現代社会論　　書評ゼミ後の感想	3年　　組　　番　氏名:
(感想はA4で1枚以内。感じたこと、提案、今後の抱負など、感じたことを自由に記述して下さい)	
(提出期限は、発表後の授業とします。7月3日(火)の13時までに提出しない場合、評価対象から外します)	

いよいよ、取り扱う本の性質である。前述のように授業時間内に実施しているため、①授業内容を補完する重要なテーマ、②眼前で生じている出来事、③大学進学後に活かせる知識、の３点を意識して選書している。2018年度と2019年度に扱った本のリスト（表１）を基にして、筆者の意図を紹介したい。

表１　2018～2019年度　「書評ゼミ」選書リスト

2018年度　1学期「書評ゼミ」選書リスト

著　者	出版年	書　　名	出版社
井手英策	2013	『日本財政　転換の指針』	岩波新書
宮城大蔵	2016	『現代日本外交史　冷戦後の模索、首相たちの決断』	中公新書
山田昌弘	2016	『モテる構造　男と女の社会学』	ちくま新書
牧原出	2013	『権力移行　何が政治を安定させるのか』	NHKブックス
宮本太郎	2017	『共生保障〈支え合い〉の戦略』	岩波新書
吉川洋	2016	『人口と日本経済　長寿、イノベーション、経済成長』	中公新書

2018年度　２学期「書評ゼミ」選書リスト

著　者	出版年	書　　名	出版社
五十嵐泰正	2018	『原発事故と「食」―市場・コミュニケーション・差別』	中公新書
加藤文俊	2016	『会議のマネジメント―周到な準備、即興的な判断』	中公新書
関満博	2018	『日本の中小企業―少子高齢化時代の起業・経営・継承』	中公新書
中公新書編集部編	2018	『日本史の論点　邪馬台国から象徴天皇制まで』	中公新書
松井彰彦	2018	『市場って何だろう―自立と依存の経済学』	ちくまプリマー新書
増田寛也	2015	『東京消滅―介護破綻と地方移住』	中公新書

2019年度　１学期「書評ゼミ」選書リスト

著　者	出版年	書　　名	出版社
猪瀬直樹、田原総一郎	2018	『平成の重大事件　日本はどこで失敗したのか』	朝日新書
NHK取材班	2017	『外国人労働者をどう受け入れるか「安い労働力」から「戦力」へ』	NHK出版新書
芹澤健介	2018	『コンビニ外国人』	新潮新書
首藤若菜	2018	『物流危機は終わらない―暮らしを支える労働のゆくえ』	岩波新書
原武史	2019	『平成の終焉　退位と天皇・皇后』	岩波新書
湯浅誠	2017	『「なんとかする」子どもの貧困』	角川新書

2019年度　２学期「書評ゼミ」選書リスト

著　者	出版年	書　　名	出版社
内田宗治	2019	『外国人が見た日本―「誤解」と「再発見」の観光150年史』	中公新書
金子勝	2019	『平成経済　衰退の本質』	岩波新書
小島道一	2018	『リサイクルと世界経済―貿易と環境保護は両立できるか』	中公新書
曽我謙悟	2019	『日本の地方政府―1700自治体の実態と課題』	中公新書
山本章子	2019	『日米地位協定―在日米軍と「同盟」の70年』	中公新書
吉次公介	2018	『日米安保体制史』	岩波新書

まず、新書を中心に扱う理由から述べたい。扱う本を図書館で借りる生徒もいれば、実際に本を購入する生徒もいる。その際、金銭的負担を小さくするため、税込1,000円前後の新書を優先して採用している（グループによって扱う本および購入金額に差が生じるため、全員に全ての本を購入することは促さない）。次にテーマと刊行年度の関係である。現代社会論という授業の性質上、眼前で生じている現代の出来事と関係の深いテーマを扱う必要があるため、扱う新書は実施年度から見て５年以内のものに限定している。古典的名著を取り扱いたいこともあるが、授業の性質上、見送っている。前述のように、筆者の授業は1989年以降の日本政治を中心に講義する関係で、経済・国際政治・国際経済・時事などについて十分にカバーできるとは言えない。そのため、2018年度１学期は財政学（『日本財政　転換の指針』）、日本経済（『人口と日本経済』）、社会保障（『共生保障』）、ジェンダー論（『モテる構造』）を扱い、授業で扱いきれない内容を補った。また、２学期は商学部・経済学部・国際経営学部への進学を考えている生徒を念頭に経済学（『市場って何だろう』）や中小企業論（『日本の中小企業』）を、地方政治や少子高齢社会に関心のある生徒を念頭に（『東京消滅』）、３・１１後の日本を振り返るという意味で（『原発事故と「食」』）を取り上げ、授業では十分に扱いきれないテーマについて理解を深める機会を提供するよう試みた。2019年度については筆者の中で意図が変化したため、後述する。

このように、「書評ゼミ」は、「議論する」能力を育み、高校と大学との学びとの「架橋」を目的とする試みであり、手に取りやすい新書を取り上げ、授業内容の補完を図っている。また、聴衆として参加する生徒には他の生徒の報告をレフリー（≒ジャッジ）してもらい、生徒同士による切磋琢磨を促す「仕掛け」を導入している。報告・議論・振り返りなど、生徒に参加を促す学習として、授業時間内に実施している取り組みでもある。本節では概要について確認した。次節では、配布物を用いて実施に至る流れを振り返りたい。

第2節　配布物など

本節では、実際の配布物を用いて実施に至る流れを確認したい。資料３は、2018年度に「書評ゼミ」を開催するにあたって実際に配布した授業プリントである（資料３）。

資料３に示したように、筆者は書評を①内容紹介、②優れた点の列挙、③課題の提示と定義した。①については「該当箇所の要約」で代用でき、②については「読み手が目を引いた点」の列挙で済むと考えた。だが、③課題の提示までできるか不安であった。そのため、資料４のような、筆者がとある勉強会で書評報告をした際に使用したレジュメを加工してサンプルを作り、配布した（資料４）。なお、資料４の講座名・日付・肩書きは配布時のものである。

資料３　2018年度現代社会論(4～7組)　書評ゼミの開催に関して

現代社会論（４～７組）　書評ゼミの開催に関して

担当：新嶋聡

【書評とは何か】

書評とは、換言すれば、**本や論文の①内容紹介、②優れた点の列挙、③課題の提示**です。

【書評の存在意義】

・研究者サイドから

論文や著書を公刊しても、誰かに読んでもらわないと意味がありません。

しかし、自分の研究や公務に追われるとじっくりと論文・本を読む時間が激減します。

そういう時、書評が掲載されていると、前述の３点を簡潔に理解することができます。

つまり、**書評とは「内容を把握する上でのガイド」**であるわけです。

・学生サイドから

大学入学後に「せっかくだから、専門的な勉強をするぞ」と思い本を手にとったところ、

「書いてある内容が難しい…。そもそも、日本語なのに日本語の意味が分からない…」

そんな時、**「内容を把握する上でのガイド」**があったら、「読みやすい」はずです。

つまり、**書評とは「チュートリアル」**でもあるわけです。

【書評を書くために必要な能力とは】

①「内容を理解する」ことです。まずは、記載されている内容を把握しましょう。

②**「内容を要約する」**ことも必要です。ダイジェスト版なら相手に伝えやすいはずです。

③**「明快に記述する」**ことが必要です。内容を自分の言葉で分かりやすく書くことが大事。

【大学の授業では】

大学進学後のゼミナール（以下、ゼミ）では、調査報告や書評を担当することが増えます。

その時、書評に慣れていればゼミでの発表の質も良く、良い成績を収められるはずです。

【進め方】

・６～７人程度でグループを作ってもらい、グループごとに発表してもらいます。

・各グループで①内容紹介、②優れた点の列挙、③課題の提示を発表してもらいます。

発表の際の持ち時間は、各グループ 10 分とします。

・発表を聞いている人たちは「レフリー」をしてもらい、発表内容を評価してもらいます。

・発表者は、発表に用いた原稿と感想を提出してもらいます。

・４月最初に説明したように、書評ゼミへの参加の具合で、各学期の成績が左右します。

しっかりと（**かつ、誰かに負担が集中しないように分担して**）参加してください。

・１学期は初めての試みであるため、担当者が例を示します。参考にしてください。

資料４　書評の例

【現代社会論　参考資料　レジュメ（報告原稿）の作成方法】

現代社会論（担当：新嶋聡）

2018/05/25

中央大学杉並高等学校

新嶋聡

五百旗頭薫、小宮一夫、細谷雄一、宮城大蔵、東京財団政治外交検証研究会編『戦後日本の歴史認識』（東京大学出版会、2017 年）

はじめに（細谷雄一）

・著者は、本書の目的を「戦後日本の歴史認識問題を可能な限り冷静に、客観的に、そして学術的に概観することを試みる」としている。

序　章　歴史認識の歴史へ（五百旗頭薫）

・本章で、著者は、「戦前日本の歴史認識＝勝者としての認識」、「戦後日本の歴史認識＝敗者としての認識」と対照をなすと指摘する。その上で歴史認識の歴史を振り返ることにより、①眼前の力や利益への正確な認識、②戦前の歴史認識からの教訓を共有することを得られると展望を述べている。

Ⅰ　戦後歴史認識の変遷を読む

第１章　吉田茂の時代――「歴史認識問題」の自主的総括をめぐって（武田知己）

・著者は、吉田茂の時代を例に、①東京裁判への道、②サンフランシスコ講和体制への道に加え、③戦争調査会への道という視点から歴史に認識問題を分析する。

・著者は、A：日本の世論の「豊饒さ」の全否定、B：敗戦処理の時間のなさ、C：吉田の強い指導力のもと、「第三の道」ではなく、東京裁判→サンフランシスコ講和体制へと進んだと指摘する。

第２章　佐藤栄作の時代――高度経済成長期の歴史認識問題（村井良太）

・著者によると、佐藤栄作の時代の日本の歴史認識問題にはA：内なる歴史認識、B：帝国のその後に対する認識、C：アジアとの和解の問題、D：欧米交戦諸国との和解の問題があるという。

・著者は、Aについては靖国神社だけでなく「明治百年」という問題点を、Bについては日韓・日中関係の改善を、Cについては東南アジア地域との「血債」問題を、DについてはベトナムとのA「関わり」を踏まえ、当該期の歴史認識問題は各々の課題が各々の形で表出したと指摘した。

第３章　中曽根康弘の時代――外交問題化する歴史認識（佐藤晋）

・本章の最大の特徴は、「憲法改正論者でありタカ派」のイメージを持たれる中曽根が、実は「表向き」の歴史認識を用いて当時の外交問題の鎮静化に寄与したことを明らかにした点であろう。その過程を、歴史教科書問題（第一次・第二次）、靖国神社参拝問題を用いて説明している。

・また、経済的な意味での国力と、友好的な国家間関係という要素のうちいずれかが存在する場合、歴史認識問題は一定の鎮静化をする可能性を有するという指摘は、示唆に富む。

第４章　沖縄と本土との溝――政治空間の変遷と歴史認識（平良好利）

・本章の最大の特徴は、①本土と沖縄の認識の齟齬、②55 年体制の沖縄への流入、③「基地の整理縮小」という３つの補助線を用いて、「沖縄問題」の構図を読者に明示した点にある。①は、「３つの琉球処分」（1878 年、1945 年、1972 年）という概念を、②は琉球民主党→沖縄自民党、沖縄社

コメント [n1]: タイトルは、「授業名（担当教員名）」。

コメント [n2]: 発表日、所属、氏名を明記。

コメント [n3]: 書評で取り上げる本に関する情報を明示して下さい。
著者名『書名』（出版社、出版年）
の４つを明記すること。

コメント [n4]: 章・節・ページ数などを用いて、「どの部分について述べているか」を明示しましょう。

会民主党→「左傾化」、沖縄人民党→共産党との提携という事実を、③は、「島ぐるみ」闘争を例に、読者に示している。

II　歴史認識と和解をめざして

第５章　歴史和解は可能か――日中・日韓・日米の視座から（細谷雄一・川島真・西野純也・渡部恒雄）

・本章は、「安倍談話」以前の 2015 年７月に実施された座談会の模様を記したものである。

・四人のコメンテーターより、「15 年戦争」という認識や国際連合（UN）を「連合国」と位置付けるなどの認識の差異、1965 年の日韓国交正常化をめぐる認識の差異、東京裁判・サンフランシスコ講和体制の認識の差異が日米関係の悪化につながる点が提示された。その上で、中国が最大の貿易相手国である点・和解の事実の発信（アジア歴史資料館、国立公文書館など）の強化・近現代史教育の強化・台湾の動向への注意が、日韓関係の悪化やツー・トラック（歴史とそれ以外を分ける）政策の再確認のポイント・「安倍談話」への期待が、共通価値と利益の共有の重要性が確認された。

・最後に「二倍謙虚になり、相手に対しては二倍寛容になれば」と、謙虚な姿勢の必要性が示された。

第６章　東アジアの歴史認識と国際関係――安倍談話を振り返って（細谷雄一・川島真・西野純也・渡部恒雄）

・本章は、「安倍談話」以後の 2016 年２月に実施された座談会の模様を記したものである。

・四人のコメンテーターより、「安倍談話」が歴代首相談話を継承した上で①大きな歴史感を提示した、②安倍政権の安全保障政策が反映された、③未来志向の「和解」が示された点、④広報に工夫があった（翻訳を政府主導で用意した）という４つの違い、オーディエンスの違い、「積極的平和主義」を重視した点が、それぞれ歴代首相談話と異なると指摘された。その上で、①力の体系、②利益の体系、③価値の体系を共有すること、2015 年の日韓合意に対して①「法的責任」の問題、②米中関係の認識の差異、③日韓の協力関係が、安定した日米関係が重要であることが確認された。

・最後にある国の国際情勢や国内情勢を理解し、相互の妥協点を見つけ出す必要性が確認された。

III　歴史認識を考えるために

第７章　歴史認識問題を考える書籍紹介（細谷雄一）

・本章は、歴史認識問題を考える上での書籍を紹介している。

第８章　戦後日本を知るうえで有益な文献を探る（小宮一夫）

・本章は、戦後七〇年を考える上での書籍を紹介している。

おわりに（宮城大蔵）

・著者から「過去の記憶」が国際政治、国内政治を悪化させうる要因となることが改めて確認され、併せて、「不断の危機管理」という観点が提示された。

コメント

・本書の特徴は、「歴史認識＝外交問題」の切り口ではなく、「歴史認識の歴史」という形で、戦後日本における歴史認識の変遷を辿った点だ。客観的に事実を確認する上で、この視点は有益である。

2

コメント [n5]: 最後に、感想かコメントを付けること。
感想＝本や論文を読んで感じたこと。
コメント＝自分の意見、提案。
という違いがあります。

資料４に示したサンプルを基にレジュメを作るよう告知したが、後述のように、初めは中々上手くいかなかった。毎年、１学期の１回目の報告準備の際は、書式を整えて提出出来ない（それ以前の問題として、グループのメンバー内でデータの統合が出来ない）ケースも多く見受けられたからだ。そのため、筆者がデータを統合し、書式を統一する手間が掛かった点が反省点である。この点

は、2018年度２学期以降に改善を図っている。

これらの配布物を基に、生徒に「書評とはどのようなものか」をイメージできるよう指導し、実施に向けての不安を払拭するよう努力した。併せて、授業のキリが良い時に進捗具合を確認する時間を５～10分程度設け、グループごとに情報共有できるよう仕向けた。このような流れを経て、2018年度１学期のゼミを迎えることになった。しかし、開催時期が一斉テスト後ということもあり、資料５のプリントを配布し、注意点を確認してゼミの開催に備える必要があった（資料５）。

資料５　確認用プリント

現代社会論（４～７組）　書評ゼミの開催に関して【20180619 確認】

担当：新嶋聡

【進め方】

・６～７人程度でグループを作ってもらい、グループごとに発表してもらいます。
・各グループで①内容紹介、②優れた点の列挙、③課題の提示を発表してもらいます。
　発表の際の持ち時間は、各グループ 10 分とします。
・発表を聞いている人たちは「レフリー」をしてもらい、発表内容を評価してもらいます。
・発表者は、発表に用いた原稿と感想を提出してもらいます。
・４月最初に説明したように、書評ゼミへの参加の具合で、各学期の成績が左右します。
　しっかりと（**かつ、誰かに負担が集中しないように分担して**）参加してください。
・１学期は初めての試みであるため、担当者が例を示します。参考にしてください。

【留意点】

・発表当日は、グループで内容紹介のプリントを配ってください。印刷は授業担当者がします。
　なお、印刷の都合上、発表日の朝８時 20 分までに職員室に原稿を持ってきてください。
　原稿は、A4 でお願いします。枚数は気にしないでください！
・大丈夫かとは思いますが、「ネットからのコピー」、「他者の著作のコピー」は認めません。
　「自分の言葉で」説明すること。
　他人の作品をコピーした場合は、「著作権法違反」になりえます（300 万円以下の罰金）。
　詳しくは、下記サイト（法務省「**著作権法における罰則規定の概要**」より）をご覧ください。
　（　http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/bunka/gijiroku/012/021101b.htm　2018/5/1 閲覧）

筆者の「書評ゼミ」は１冊を複数人で書評するため、グループワークを行う必要がある。そのため、グループ内の負担を均等化させるよう、注意喚起をしている。また、近年、ネット上の文章の「コピペ」や無断引用によるレポートが、大学で問題となっている。念のためではあるが、抑止のために法務省のホー

ムページを引用し、「自分の言葉で書く」ことを徹底させた。以上が、「書評ゼミ」実施までのレディネス（準備）である。

第3節　小括

本章では、「書評ゼミ」のアウトラインを示した。前述のように、議論できる素地を養う報告ができるように指導することに力点を置いた。また、グループ内での進捗具合の確認を通した対話的な時間の確保、コメントペーパーや振り返りシートの記入などを通して授業への参加を促し、生徒同士が切磋琢磨を促す仕組みを導入した。当時筆者は、「これだけ用意すれば、上手くいくだろう」と一安心していた。

しかし現実は、「言うは易し、行うは難し」であった。後述のように2018年度は反省点ばかりであった。2018年度の反省点および2019年度へのフィードバックについては、章を改めて詳細に振り返ってみたい。

第2章　実践例

本章では、2018年度および2019年度に実施した「書評ゼミ」の振り返りを行うことを目的とする。第１節で2018年度の総括を、第２節で2019年度の総括をする。これらを踏まえ、第３節では2021年度以降に実施する際の留意点を指摘したい。なお、生徒の感想などの引用は2019年度のものに限る。引用の承諾確認は2019年度から実施したためだ。

第1節　2018年度の実践

本節で振り返る2018年度の実践は、反省点ばかりである。言い訳はせず、「何が上手くいかなかったか」を列挙し、「次年度にどう改善したか」を明らかにしたい。

１．改善を要した点

①本の偏り

最初の失敗点は、本の偏りを防げなかったことである。「6冊提示すれば、6グループに自然と分かれるであろう」という筆者の希望的観測は、早々に打ち砕かれた。1学期は『モテる構造』・『人口と日本経済』・『権力移行』が各クラスでグループの重複が見られた。2学期は『会議のマネジメント』が3クラスで（！）重複が見られた。予想以上に、読みやすそうな本に流れる傾向が見受けられた。「多くの本に触れて、視野を広めてもらう」思いは、早々に挫折した。

一方、想定外の効果も確認できた。それは、同じ本を2グループで書評することにより、視点の違いを学べた点である。実際の書評も評者によって論点・意見が異なるため、その点を疑似体験できたことは意義があったと言えよう。同じ素材を基に多様な視点を共有できた点は、思わぬ副産物であった。なお、筆者は、「2019年度1学期に改善されない場合、2学期は強制的に6冊に振り分けする」と心に決めていた。

②タイム・マネジメント

次に、報告時間の超過が多く見受けられた。筆者側の不手際として、資料5に示したようにレジュメの上限を決めなかった点が挙げられる。生徒にとっても初の試みであったため、1学期は「レジュメを作成し、当日発表する」ことがゴールになってしまったようである。これは、事前に原稿の読み合わせを行う、時間を計って大まかなシミュレーションをしておく段階まで到達しなかったことを意味した。確かに、本の性質上、要約をすることが難しいものもある。1学期では、『現代日本外交史』と『権力移行』は前提となる知識を多く必要としたため、要約が困難であったようだ（ただし、この2冊は授業へのフィードバックが最も大きい2冊でもある）。2学期であれば、『日本の中小企業』と『日本史の論点』が該当しよう。このことから、「事実の多い本の要約は、前提となる知識が備わっていないと要約しにくい」という傾向が明らかとなった。これらを受け、2学期は「A4で4枚以内」と上限を設けたところ、1学期の反省を2学期に活かせるグループも登場したため、内心ホッとした。

③トラブル・シューティング

これも、筆者の見込みが大幅に甘かった。１学期の１回目の報告準備の際は、筆者の方でデータを統合し、書式を統一する手間が掛かった。だが、２学期はデータを統合して提出するグループが多くなった。何事も、経験ということであろうか。

一方、最も頭を悩ませたのが、印刷用のデータを持参するはずの生徒が当日欠席したケースである。事前に提出して修正した際のデータがあったため当日の発表は行えたため事なきを得たが、こちらの想定以上に締め切りを早め、万が一の事態に備えておく必要性を痛感した次第である。この経験は、2019年度に大いに活きることとなった。

なお、生徒側のトラブル・シューティングとして、１学期は質問への準備が不足（むしろ、どう質問されるか分からなかった）という状態から、質問されそうな点を予測できるよう変化する生徒が登場するなど、改善が見られた。

④感想とコメントの違い

「自分の意見を言う」ことは難しい。１学期は感想が大多数であったが、２学期はコツを掴み「自分の意見を言う」傾向が見受けられた。「慣れ」からくるものなのか、それとも「扱う本の難易度」によるものなのか。筆者はふと疑問に感じた。この疑問に対する答えを明らかにするため、「2019年度１学期は読みやすい本でコメントする能力を育成」し、「２学期は本の難易度を上げてコメントできるか試す」方針を確立させたのであった。

２．生徒の反応

2018年度の生徒たちには感想等の引用許可を得ていないため、感想などを見て筆者が集約する形で「生徒の反応」のまとめに代えてみたい。

①１学期の傾向

・とにかく大変であった

・感想とコメントの違いが良くわからない

・「ようこそ卒業生」での話を聞く限り、大学でも必要な技術なので頑張りたい

生徒の感想は上に示した３つに集約できよう。大変であったことに関しては、筆者の方で難易度調整が十分に機能していなかったこと、お互いに初の試みであったことなどに起因するため、お互いに経験を積みスケジュールを調整すれば解決できると考えられた。

次に、感想とコメントの違いであるが、自分の意見を言えるようになるには本の読み込み、そして、著者の意見に対する反論（あるいは賛意）が得られないと難しい。「何度も読み込めば、筆者の意見に対して自分の意見も確立するであろう」と考えた。

最後に、大学の学びの予行演習であることを感じてもらえたのは、ありがたかった。本校の学校行事に「ようこそ卒業生」という卒業生を招いて話を聞く機会がある。そこで、大学生活を送っている先輩方からゼミの様子を伺い、生徒の中にも「大変だが、通過儀礼の様なもの」という意識が生まれたのは、大学附属校である本校の強みであると改めて感じた次第である。

総じて、１学期は生徒に負担を掛けてしまったことが大きな反省点であった。筆者の非である。その点を具体的に指摘する感想は、大いに参考になった。続いて、１学期の傾向に移りたい。

②２学期の傾向

・１学期の失敗点を改善できた（主に技術面）

・自分の卒業論文に役立てることができた

・他のグループを参考にする視点が多くなった

この３点に集約できると感じた。まず、１学期の失敗点（グループ内の意思疎通、データの授受、情報の取捨選択、読み込みなど）を改善できたという感想が多く見られた。初見では困難であるが、二度目はやり方やコツがわかったことの裏返しであろう。本を読み込んだという感想も多くなり、準備に時間を割く余裕が出たことが伺えた。体育祭や一斉テストなどのスケジュールとの関

係を考え、優先順位をつけて作業していたという感想もあった。これらの感想は、開催時期を設定する上で、2019年度に活かせるものだった。

次に、卒業論文へのフィードバックという感想も見受けられた。要約する能力が向上した、語彙が増えたという技術面のフィードバックもあれば、卒論のテーマと重なり勉強になったというフィードバックもあった。お役に立てたのであれば、これ幸いである。

最後の、他のグループを参考にする意見が増えたという点が特筆すべき点である。１学期は自分のことで精一杯だったが、２学期は他のグループの良いところを自分のものにしようという感想が増えた。なお、１学期の報告を見て筆者は『会議のマネジメント』を２学期のリストの中に入れた。その理由は、時間の使い方・黒板や配布資料の使い方などを学んで欲しいと感じたためである。どんなに内容の良い報告であっても、表現の仕方１つで聞き手の印象は大きく変わる。換言すれば表現の仕方１つで評価も変わる。このことを具体的に示した『会議のマネジメント』は、生徒に想像以上に好評であった。授業内容に直接は関係しないが、筆者の思惑が的中し、胸を撫で下ろしたことを今でも覚えている。

③１年間の振り返りレポートでの傾向

筆者の現代社会論では、年明けの３学期冒頭にレポート２本の提出を課している。１つは課題レポート、もう１つは、字数1,200字程度の１年間の振り返りレポート（以下、振り返りレポート）である。今まで同様、振り返りレポートの傾向を分析してみたい。

・質疑応答が良い経験になった

・眼前で生じている出来事に関心を持つようになった

・経済学部のゼミ対抗プレゼン大会と同じだ

まず、質疑応答に少しでも「慣れて」もらえたのは何よりである。人前での発表ですら敬遠されがちである以上、フロアから質問されることは正直勘弁してもらいたいのが生徒の本音であろう。だが、大学でのゼミは発表会ではない、

議論の場である。そのため、質疑応答に慣れてもらう必要がある。社会人になってのプレゼンであれば、なおさらのことである。筆者は、「質問されて困るのであれば、事前に質問を予想しておけばよい」と考えており、学会報告などでは事前に「想定問答集」を用意して臨んでいる。そのため、原稿チェックの際、少しであるが質問されるであろうことを予測し、「小出し」にして返却している。それでも、最初は難しいようであった。要は、慣れである。そのような中、２学期はフロアからの質問を予想し、的中させた生徒も見受けられた。自信につながったのであれば何よりである。しかし、「書評ゼミ」では（報告10分程度）＋（質疑応答10分程度）＝（合計20分程度）であるが、大学のゼミで100分である。単純な比較は出来ないが、今の５倍程度の時間を上手くマネジメントできるよう、しっかりと本を読み込み、質問を想定し、議論できるようになってもらいたいというのが、筆者の願いである。

次は、現代社会論の授業の特性でもある。振り返りレポートを見る限り、生徒が関心を寄せる歴代内閣は、21世紀以降の内閣（小泉純一郎内閣～第二次安倍晋三内閣）に集中している。自分にとっての同時代史を学ぶことは身近な話題であり、興味・関心を引きやすいという特性があるからだろう。それに加え、「書評ゼミ」では授業では直接扱いきれないが眼前で生じているテーマを扱っている本を多く取り上げた。例えば『原発事故と「食」』に触れて「もう７年が経っていたのだ」と時の経過に驚く感想もあれば、『東京消滅』に触れて少子高齢化と雇用の減少に気付くなど、身近な話題に対して多くの発見があったように思われる。そのため、授業の一環として「書評ゼミ」を実施することは、身近な社会問題に目を向ける格好の契機を提供し、授業を補完したと考えられる。また、テーマ史として扱った環境問題（１学期）、教育問題（２学期）に関する反響も多く、生徒の感想に目を通した筆者は「子どもの貧困」は後述のように2019年度の「書評ゼミ」で扱うべきと至ったのである。

最後に、実際に大学で実施されるゼミとの共通点である。筆者は大学のゼミ、特に、初年度の「基礎ゼミ」に相当する授業の予行演習を想定して「書評ゼミ」

を運営している。そのため、実際の大学での実践との共通項が見つかり生徒は喜んでいた。なお、筆者は大学で授業を担当したことはないため、内心「これで大丈夫か？」と一抹の不安を抱いていたため、正直、安堵している。初年度であったが、目標はおおむね達成できたようだ。

第2節　2019年度の実践

本節で振り返る2019年度の実践は、2018年度の反省点を大きく活かせたものであったと筆者は胸を張って言える。また、テーマに沿った選書、コメンテーターの導入など、新たな取り組みを導入できた点は、大きな収穫だ。以下では、2019年度の実践を振り返る作業を通して、「次年度にどのような改善ができるか」を考える材料を提供したい。

１．改善点

①本の偏り

2019年度１学期も、同様に偏りが見られた。具体的には、『「なんとかする」子どもの貧困』は２クラス、『コンビニ外国人』は３クラスで（！）重複が見られた（なお、４クラス中１クラスは６冊全て扱えた）。同じ本を複数の班で扱うことは視点の違いを学べる上では良いが、多くの本に触れて視野を広げてもらうことも大切である。そのため、前述のように２学期は「１冊の本を担当できるのは１グループのみ」と割り振った。すると、あっさりと本の偏りは改善された。初めから行えば良かったと痛感した次第である。

②タイム・マネジメント

2019年度は「報告時間の厳格化」を意識した。１学期は「５分経過」を知らせる紙を提示する形で時間を意識させる「仕掛け」を追加した[1]。そして２学期はキッチンタイマーを用いて、15分経過したら鳴るようにアラームを追

[1] ボクシングのラウンドガールのように「５分経過」という紙を持って教室内を歩いている筆者の姿に対して失笑が生じていた気がするが、気にしないこととする。

加した。これらが功を奏したのであろうか、2019年度は報告後に議論の時間を確保でき、多くの質問が寄せられたクラスも見受けられた。筆者のもくろみである議論する時間が増加したことは、良いことであった。

このように、生徒たちが時間の管理を上手く行っていることが2019年度の特筆すべき点であると感じた。生徒の感想を引用して、その様子を明らかにしてみたい。１学期の段階から「前日に、各自で自分の担当部分をよむのに時間をはかって10分前後を目安に調整したことはとてもよかったと思います」と読み込みをして本番に備える生徒が、格段に多くなっていた。事実、事前に読みこんだか否かが声量・時間・読み間違えの回数などの面で、如実に現れていた。一方、「今回は本番前の練習時間をあまりとらなかったので、原稿を修正する時間がなかった。もし読み合わせを行えていたら、10分程度で収めることは十分にできたと思う」と、少々悔しい思いをした生徒がいることも事実である。時間管理に大きく関係する本の内容理解に関しては、「誰が読んでもわかりやすくするために、まず自分が100%理解する必要があったため、専門的な用語をかみくだいて理解するのが難しく大変だった。文章を書く時は、ただ本のコピペにならないよう自分の言葉に直して書いた。また、コメントを書くときに現状で何が起こっているかを調べなおし、さらに知識を深めることができた」という感想に示されるように、人前で発表する際の苦労、工夫などを体で理解できた生徒が多く見受けられた点も、大きな収穫であった。

以上のように、時間の厳格化は「濃密な報告」をもたらしたと考えられる。

③トラブル・シューティング

前述のように、2018年度は発表当日に原稿データを持ってくる生徒が病欠をする、発表グループのメンバーが欠席するなど、「データやメンバーの欠如」が多く見受けられた。筆者としても誤算であったため、2019年度は「原稿は１週間前に完成させる」よう締め切りを早め、不測の事態に備えた。2019年度においても体調不良で欠席する生徒は見受けられたが、原稿は事前に完成しているため、「誰が穴埋めをするか」以外は混乱する様子は見受けられなかっ

たと思われる[2]。その点に関しては、「今回、課題となった図書の要約を班員皆で分担してやったが、班で特にスケジュールを決めずにやっていた。先生の助言によってはじめて提出日の前に班独自の提出日を定めることができた。これがなかったら、もし誰かが休んだり、忘れたり、遅れたりしたときに詰んでいた」という生徒の感想が物語っていよう。万が一に備えることが重要であることを、実感してもらえたようである。

また、フロアの質問に対する意識も変わっていることが伺える。「今回私は質問されなかったが、自分の意見について質問や反論をぶつけられたときに上手く返せるかとても不安になった。だから自分の意見に納得してもらえるために裏づけや理由を事前に準備しておくべきだと思った」、「今後もリハーサルを行い、対策したいと思った。グループラインなどで想定される質問を共有できたのも良かったので、次回もそうしたい」と、質問に備える意識が強まったのは大きな改善点である。前述のように、2019年度１学期は比較的読みやすく時事的な話題を扱った本を選書した。班によっては「時間を有効に使うことができ、発表の１週間前くらいでほとんどの作業が終わってしまいました」とスムーズにレジュメ化する作業を完了させる班も見受けられた。作業を前倒しに行うことによって生まれる時間の余裕が、質疑応答を含んだ報告の質を上げることにつながったのだろう。改めて、授業担当者によるトラブル・シューティングやマネジメントの大切さを感じることとなった。

以上のように、時間の厳格化はトラブル・シューティングに割く時間を増やし、心に余裕を与えるという効果をももたらしたようである。

④感想とコメントの違い

詳細は⑥で触れるが、１学期に読みやすい本を選書した関係から、コメント（あるいは、意見や考え）を述べる生徒が多かったと感じた。中でも、１学期

---

[2] もっとも、当事者たちにとって修羅場であることは変わらず、代打要員は必死になってレジュメを読み込んでいたことだろう。これも、良い経験である。

の段階で「要約より提案を考える方が難しいということが分かりました」と気づく生徒がおり、更には、「～すべきだ、～した方がいいなどのコメントを書くとき、今の現状はどうして良くないのか、メリットはあるのかなど様々な側面で調べてより良い提案をする必要があることを知った」など、コメントをする上でのポイントを実感した生徒が複数見受けられた。少々自画自賛となるが、（比較的）読みやすい本を選書してコメントすることに力点を置いた効果が現れたと感じている。なお、「この本の内容をしっかりと理解するために分からない言葉は辞書を引き、言葉の背景や情勢までも理解しようとした。たった１つの章を読むのに半日ほどかかった」と、本書の内容を理解するために格闘した様子が伝わる感想も見受けられた。また、「「日本の特色」といった抽象的な言葉は特に突っ込まれやすいということが良くわかりました」、「文化のことに関して言ってしまうと色々な価値観があるので簡単には文化のことは言うことができないのだと分かった」のように、コメント内容に具体性を持たせることが必要であると感じた生徒もいる（抽象的な用語を使わざるを得ない状況もあるが）。

コメントも、「本書全体のコメント」と「各章のコメント」と項目を改めて記述する班が増えた。書評とは本来、１冊全てを俯瞰した上で紹介およびコメントするものであるため、早い段階で「本書全体のコメント」を設けられたのは、大きな成果である。例えば、１学期の段階から「本の根本的な質問をされた時、少しドキっとしました。自分の章だけでなく全体への質問も考えておくべきだったと思いました」と、本の一部分を要約するだけでは不十分であるということに早々に気付けたのは、2019年度の大きな収穫であった。また、質問の上手な生徒もおり、良い意味で緊張感の漂う報告に恵まれたクラスも登場した。そして２学期の『平成経済』の書評では、グループ内ですら本書に対する意見が賛成・反対と分かれ、生徒たちにも新鮮に映ったようである。

また、１つのコメントや質問が呼び水となり、議論へと移行する過程に驚く生徒も多く見受けられた。これは、１学期の「私たちのグループは「外国人労

働者を受け入れたら、日本人の職が奪われるのでは」という質問に対して、「韓国のように制度をつくればよい」と答えたが、「外国人労働者が日本に来なかったら？」、「日本人がやりたくないような仕事は、外国人だってやりたくないのでは？」という更なる疑問が生じた。」という感想に端的に示されていよう。外国からの人材を受け入れることによって現地での雇用が減少する課題は、欧州、特にドイツやフランスで大きな課題となっており、日本国内でもいわゆる「３Ｋ」の仕事への従事者が少なく、外国人技能実習制度が悪用されている問題も明るみになりつつある。このような事象について議論を通して認識するだけでも、当事者としての意識は高まるはずである。議論を通じて眼前の問題が何故生じているのか、その仕組みを理解してもらいたいと、筆者は改めて感じたのであった。

以上のように、本の難易度を調整することで「コメントを考える時間が増える」ことが明らかとなった。この点、今後も活かしていきたいと感じた。

⑤用語集や年表、黒板の活用などの工夫

2018年度に比べ、「聞き手に理解してもらう」ための工夫が早い段階で見受けられた。学期ごとに概要を紹介してみたい。

［１学期］

『平成の終焉』を扱ったあるグループは、レジュメとは別途Ａ４で１枚程度の用語集を作った。例えば、「皇室典範第４条【即位】」、「皇嗣」、「行幸」、「行幸啓」、「超国家主義」など、耳慣れないであろう用語を紹介し、報告の簡素化や理解促進を促した。生徒の反応はおおむね良好であり、２学期に採用するグループも増えた。

［２学期］

日米関係は時系列で理解する必要がある。そのため、『日米安保体制史』を扱ったあるグループはＡ４で４枚になる力作の年表を添付した。これには、筆者も頭が下がる思いであった。なお、グループによっては報告中に用語を板書していたが、「カリカリという板書の音が気になった」という感想が多く、報

告中の板書は止めておけばよかったと反省した。

以上のように、「相手に分かるように伝えるには、どうすればよいか」という視点は大切であり、工夫を凝らそうとする姿は、生徒に好意的に受け入れられ、刺激になったようだ。

⑥テーマに沿った選書の導入

筆者にとっても初の試みであった2018年度は、多様な本に触れてみるという考えでの選書であった。併せて2018年度は、平成という時代の終焉、出入国管理法の改正など、大きな変更が公表された１年でもあった。授業でこれらのテーマを扱う必要があるため、「書評ゼミ」に反映することとした。また、生徒の中にも18歳となり選挙権を有する者も現れ、2019年は「亥年の選挙」（４月に統一地方選挙・７月に参議院議員通常選挙が挙行される年）であったため、国政だけでなく地方政治を学ぶ必要性も感じた。そして、2020年には東京オリンピック開催を控えている（と、2019年度２学期の際は考えていた）ため、「爆買い」・「インバウンド」という言葉に示される観光政策についても学ぶ機会を設けたいとも考えた。だが、講義形式で扱うには授業時間数が足りないという制約もある。

このような考えから、2019年度からはテーマに沿った選書を実施した。テーマと選書のカテゴリーは、以下の通りである。なお、書誌の詳細は表１に記してあるため、書名のみ明記した（資料６）。

資料６　2019年度のテーマに基いた選書

１学期

テーマ①：入管法改正後の日本の外国人労働者

⇒『外国人労働者をどう受け入れるか』・『コンビニ外国人』

テーマ②：日本経済の身近な実情

⇒『物流危機は終わらない』・『「なんとかする」子どもの貧困』

テーマ③：平成という時代を振り返る

⇒『平成の重大事件』・『平成の終焉』

２学期

テーマ①：環境と経済、経済政策への理解を深める

⇒『平成経済　衰退の本質』・『リサイクルと世界経済―貿易と環境保護は両立できるか』

テーマ②：観光政策と地方政府の現状を知る

⇒『外国人が見た日本―「誤解」と「再発見」の観光150年史』・『日本の地方政府―1700自治体の実態と課題』

テーマ③：日米同盟とは何か

⇒『日米地位協定―在日米軍と「同盟」の70年』・『日米安保体制史』

反響が大きかったのは、１学期では『「なんとかする」子どもの貧困』である。この本を選んだ要因は、前述のように2018年度の１年間の振り返りレポートである。2018年度２学期の授業ではテーマ史として教育問題を扱い、「子どもの貧困」や「留学生30万人計画」などに触れた。その後の１年間の振り返りレポートで、「子どもの貧困」については実感がなかったという感想が多く寄せられたことが、筆者には危機的状況に映った。「子どもの貧困」は阿部彩（現：東京都立大学教授）が2008年に『子どもの貧困』で提唱した概念であり、筆者が授業で取り上げる10年以上から問題提起されている政策課題だからである。何故、実感がわかなかったのか、授業で取り上げていなかったからか。筆者は疑問を抱いた。授業プリントを見直したところ、「チルドレン・ファースト」を掲げた民主党政権の話をする際に抜け落ちており、筆者の不手際であることが明らかになった。その反省もあり、2019年度は「子どもの貧困」を

テーマとした新書を扱おうと考えた。

さて、２学期は『日米地位協定』・『日米安保体制史』が共に大きな関心を呼んでいた。2019年は中華人民共和国建国70年であったため日中関係について理解を深めようかと考えていたが、戦後の日本を大きく規定する日米関係について時間を割いて話したいとも感じていた。そのような中、概説書として『日米安保体制史』が、在日米軍基地に焦点を当てた『日米地位協定』が出揃ったこともあり、日米同盟について学ぶ時間を設けることができた。時期的にトランプ大統領が日本に対して「思いやり予算」の増額を求める報道、日本政府が核兵器禁止条約への参加を見送る報道などがあったからだろうか、２冊の書評は生徒たちの耳目を引いており、感想でも同様の傾向が伺えた。

以上のように、テーマを設定しての選書は時流を反映させることによって、授業内容との相乗効果を生むと改めて感じた。

⑦コメンテーターの導入

2018年度のゼミを通して、まだまだフロアからの質問が少ないと感じた。この現状を打破するには、コメンテーターの存在が必要であると確信した。ご存知のように、コメンテーターはテレビのワイドショーでは自身の意見を述べ、話を進める役割を担う。格好よく映る役だが、人前での発表に慣れている人でないとこの役は担えない。このようなモヤモヤを抱えて2019年度１学期を送った。そのような中、2019年度２学期は留学から戻ってくる生徒がいた。「海外での学びで議論することに慣れた生徒なら真新しい視点でコメントし、議論の呼び水になってくれるだろう」と考え、コメンテーターを打診したところ快諾してくれた。そのため、前々から温めていたコメンテーターの導入が決まった。

筆者の予想通り、いや、予想以上にコメンテーターの果たした役割は大きかった。そこで、生徒から寄せられたコメンテーターへの賛辞の一部を紹介してみたい。「コメンテーターの質問では章ごとの質問ではなく、全体に対する質問がきました。（中略）コメンテーターは途上国の視点で考えており、質問の返答に困った時がありました。このことから、１つの視点にしぼらないで広い視

野をもって物事をとらえなければならないと思いました。」(a)、「今回コメンテーターとのやりとりを前の班を含め聞いていると、「題名」についての自分の意見を大切だと思ったのでしっかりと自分の意見を述べられるようにしていきたいと思います。」(b)、「自分の意見を持ち、相手の意見の良い点、悪い点をピンポイントで抜き出すことができていてすごいと思った。」(c)、「今回新たにおかれたコメンテーターの存在はすごく大きかったです。コメンテーターのコメントや質問はどれも的を射ていて、どんなことを話すのか毎回楽しみでした。それらによって自分もより深く理解することができました。」(d)。

(a) に示されるような「全体に対する視点」こそ、一人で書評をする際に求められるものである。筆者は度々指摘するも深く理解してもらえない点に、歯痒さを感じていた。だが、コメンテーターからの指摘によって、発表グループはその点を理解してくれたようである。感想から分かるように、この時に扱った本は『リサイクルと世界経済』である。我々は日本という先進国で生活しているため、どうしても先進国の視点になってしまう。そのため、コメンテーターから途上国の視点で質問されたことを通して良い意味で戸惑い、学んだようである（もっとも、予想して欲しい範囲の質問だが)。また、(b) に示されるように「タイトル」の対するこだわりに気が付いてくれたのも、良い学びであろう。そして、(c) に示されるような「良い点・悪い点」の両方を列挙することの必要性を感じてもらえたのが、何よりの発見である。このような大活躍があってだろうか、(d) に示されたように「期待されるコメンテーター」としての存在を確立できたようである。

このように、生徒同士の議論を通して多くの気づきがあったことが伺える。生徒同士が議論し、至らぬ点に気付き改善点を見出す。そして、その改善点を出発点として議論をする。この流れを経験できたことは、大学進学前の生徒たちにとって大きな財産となったと考えられよう。なお、コメンテーター自身も当初は不安を抱いていたようだが、回数をこなすうちに自信を持ち、大きく成長できていたと筆者が感じている点を付記しておく。

２．生徒の反応

①１学期の傾向

基本的には2018年度同様の傾向であったが、以下の点が早々に意識された点は大きな前進であると感じた。

・報告には予想以上に時間がかかる

・聞き手に分かるように伝えるには工夫が必要だ

・質問されなかったら良かったが、質問に答える準備は必要だ

重複になってしまうが、扱う本の難易度を下げた（≒身近な問題を取り上げた、専門書に近い本は外した）こともあり、本書の概要をまとめる時間は圧縮された。そのため、レディネスに割く時間が増えたということであろう。また、筆者も2018年度の経験から、用語集・年表を付した方が生徒の理解が捗ると気付いた点が、改善点であろう。

②２学期の傾向

基本的には2018年度同様の傾向であったが、以下の点が示されたことから、授業とのかかわりを意識したテーマ設定による選書が学習効果を高める事実を筆者に認識させた。

・「失われた30年」「アベノミクス」など授業内容と関連があり理解しやすかった

さて、２学期最大の収穫は以下の指摘である。少々長いが引用してみたい。

「１学期は本を要約し、フロアーに分かりやすく伝えるという難しさを、２学期は本をしっかりと読みこんでいろいろな質問に答えるという難しさを学ぶことができ、２回やって１学期よりも２学期で上手くできたので良かったと思う。この経験を大学でも活かしていきたい」（生徒A）

「今回の書評ゼミは全て思い通りに事を運ぶことができたように思う。１学期の発表とは雲泥の差であり、確かな成長を感じることができた。（中略）学んだことのなかで一番重要だと感じたのは、やはり「時間の使いかた」だと思う。本番の発表時間もそうだが、準備段階での「時間の使いかた」が大切

だと学んだ。これからの活動でもかなり活きてくるのではないかと思った。印刷前、確認前、提出前などさまざまな要素が提出期日を前倒しさせる。しかし、そうして余裕をもって完成させることで＋αを考えたり誤植を発見することができる。結果的にはより良い発表につながっていくのだと思った」（生徒B）

両生徒の感想は、想定以上に核心を突いたものであった。生徒Aの感想は2019年度の改善点そのものであり、生徒Bの感想は筆者が論文執筆時に（今も）痛感している課題そのものである。これだけ端的に指摘できる生徒に恵まれた筆者は、幸せ者である。

③１年間の振り返りレポート

全体的な傾向は、2018年度と変わらない。2019年度に目立った点は、「主権者としての意識」が散見されたことであろう。2019年７月に第25回参議院議員通常選挙が挙行され、選挙権を行使した生徒も見受けられた。そのためであろうか、授業そのものの感想より、「選挙運動やマニフェストを見聞きした」「(選挙権を有していないため）自分が投票する際の参考にしたい」という、主権者として成長する姿が多かった印象がある。現代社会論は公民科の科目である。そのため、政治に参加することのできる人々、つまり「公民」を育てる上で何らかの契機となったのであれば、ありがたい限りである。

第3節　小括

本章で確認したように、2018年度の反省を踏まえ2019年度の実践は大きく前進した。特に、「時間の厳格化」、「テーマに沿った選書の導入」、「コメンテーターの導入」は大きな成果であったといえよう。

生徒側の気づきとして、「誰か一人でもサボれば組織が動かなくなる絶妙な人数でのグループ構成なので、皆責任をもって取り組んでいたように思えた」と、人数構成が生徒一人一人に責任を持たせて行動させる要因となった点は、筆者の想定通りであった。そして、それ以上に、筆者の意図するところを正確

に指摘できる生徒、ゼミを通して大人へと成長する生徒の姿を目の当たりにできたことは、得難い経験であったと感じている。

おわりに

以上のように、本稿では2018・2019年度の「書評ゼミ」の振り返りを行った。本稿を執筆する作業を通して、筆者なりの成長を確認できた気がする。そういった意味では、教育実践報告というよりは、備忘録という性格に近いかもしれない。お気づきの点などがあれば、一報いただけると幸いである。

なお、2020年度は「書評ゼミ」を実施しなかったため、方法論の振り返りだけでなく、筆者自身が久しぶりに書評をすることを通して、自己研鑽に代えてみようと考えた。その成果については『アクティブ・ラーニングとは何か』を書評した別稿をご覧いただきたい。

本稿では「書評ゼミ」の振り返りを行うことが目的であった。そのため、「書評ゼミ」のような参加型授業と新学習指導要領に示され2020年度から本格的に導入された「主体的・対話的で深い学び」、いわゆるアクティブ・ラーニングとの関りや可能性については、考察していない。両者の関係については、別の機会に論じてみたい。